



わたしの研究 ④

テーマ

〈音〉 〈音楽〉 そして、ひとをつなぐ

吉津 晶子



1. 音・音楽の可能性

私の専門分野は音楽教育、そして音楽療法です。特に音や音楽を使った非言語的コミュニケーションについて長い間研究してきました。

フィールドとしては、特別養護老人ホームや老人保健施設の利用者（主に認知症）に対する音楽アクティビティーや音楽療法です。音や音楽は、過ぎ去った過去の記憶や感情を浮かび上がらせる機能があり、認知症のお年寄りと一緒に歌い、笑い、ときには泣き、思い出と感情を共有し、参加者同士のコミュニケーションが円滑に運ばれるよう配慮しながら携わってきました。

R・バトラーによって提唱されたライフレビュー（Life review）という概念から発展、普及した回想法（Reminiscence Therapy）と音楽療法との関連も大きく、一昨年、バトラー博士とNYのILC本部でお会いできた際、音や音楽を媒体とした可能性の広がりを変えて認識しました。

2. 世代間交流研究へのきっかけ

「きょう、子どもたちは来るのかね？」

ある高齢者施設での音楽療法セッションを始める前にこう尋ねた方がいました。普段の

セッションでは、あまり積極的に参加されない方なのですが、前回のセッションに保育園児達が来ていたことが忘れられないというのです。子どものもつエネルギーは、周りにいる人に圧倒的な力をもって伝わります。認知症の高齢者に対しても、子どもの動き・声・目は強烈な印象を与えるのです。

高齢者施設は、よく小さなコミュニティに例えられます。一つの建物の中に数十人の高齢者がいて、施設の職員がいます。その年齢の幅は10代から90、あるいは100歳代までとても幅広いのです。ただ一般の社会と違うのは、子どもの存在がないということです。このような環境に生活している高齢者にとって、音楽療法の時間だけでも子どもが身近に存在するということは、とても新鮮で強い体験となることが分かりました。

この経験から、お年寄り子どもという形の世代間交流について意識し始めました。しかし15年ほど前のこの時期は、世代間交流という考え方や具体的な交流のための方策を考えるまでには至らず、経験上から「年齢の離れた世代を結びつけること」の可能性を感じた時期でもありました。

その後、世代間交流について研究を始め、現在に至るのですが、この間、さまざまな可能性を見出すと同時に、さまざまな弊害も目にする事となりました。

3. 世代間交流における共有体験の重要性

世代間交流プログラムの立案・実施を行なう場合、子どもから高齢者へ、または高齢者から子どもへという一方向性の働きかけが交流初期には多いということが分かってきました。また実際にプログラムを立案する職員にとっても、ある一方の集団を中心に援助・支援するということがやりやすいという点から、一方向性を主体とした交流プログラムが現実的には多いのです。

例をあげるとするならば、高齢者から子ど

もへという形は、絵本の読み聞かせや昔の体験を語る、昔遊びの伝承等の活動、子どもから高齢者へという形は、慰問型の演奏活動等です。これらの活動には「教える・教えられる」といった関係性が前面に出てしまうこと、そして積極的に関わろうとする高齢者と傍観者としての姿勢を崩さない高齢者、そして高齢者に馴染みきれない子どもという状況を生み出していました。

「教える・教えられる」といった上下の関係性は、主体と客体の役割交換を通じた交流プログラムにおいては効果的に機能しますが、高齢者の中には「教えられる」という立場に立つことに大きな抵抗を感じる方も存在し、その方をどうフォローするのが課題となってきました。そして高齢者に馴染みきれない子どもへのフォローという課題もありました。

それでは「教える・教えられる」といった上下の関係性ではなく、そして参加者の間にある隔たりを解消できるような、「共有」するという水平の関係性を築くことのできるプログラムを考案できないだろうかと考えました。

4. ドラムサークルの実践を通して

ドラムサークルとは、ドラム (drum) とサークル (circle) という二つの言葉からできており、ドラム (太鼓類) でサークル (円) をつくって演奏する活動そのものを指しています。このドラムサークルは、アーサー・ハル (米) によって考案され、現在、全世界に広がっています。ドラムを輪になって叩くという以下のようなシンプルな活動です。

- ①参加者が一体感を感じながら時間を共有する。
- ②使用する楽器は打楽器を中心とした誰にでもすぐに演奏できる親しみやすいもの。
- ③参加者の年齢を問わず、音楽経験を必要としない。
- ④参加者は、自分が間違いはしないかという

心配をする必要は全くなく、ファシリテーターの進行によってどんなハプニングも即興上の楽しい要素となってアンサンブルが発展していく。

このドラムサークルを世代間交流プログラムに取り入れようと4年ほど前より熊本ドラムサークルを立ち上げて活動を開始し、高齢者と子どもといった特定の世代間のみならず、さまざまな世代が参加できる音楽空間を提供できるように努めてきました。その結果、音楽が世代間交流プログラムの中で効果的に機能するということが次のように分かってきました。

- ①非言語的活動が多く、言語に依存しない分、他のコミュニケーション方法 (アイコンタクト等) を自然に誘発する。
- ②同じ時間、同じ音楽空間を共有することを通して、親近感がわきやすい。
- ③活動自体に緩やかな枠組が存在し、安心感や安定感を得られやすい。

以上のように、音楽そのものがコミュニケーションツールとして機能し、人と人を結びつけ、集団の中で「共有体験」を得やすいような環境を創出することが可能であるということが分かってきました。

この「共有体験」は音楽プログラムのみに限らず、他のプログラムにおいても可能であると考えられますが、音楽の機能の持つ可能性はより大きいといえるのではないのでしょうか。世代間交流に参加する個人個人の中にお互いを尊重し合う体勢ができ、発信することと受容することを自然に行なえるようになって、初めて世代間交流プログラムにおける一つの到達点に達するのではないかと考えています。

熊本ドラムサークル

<http://d.hatena.ne.jp/kumamoto-dc/>

(本研究所研究員 音楽心理学)